2021 年度　研修の概要

研究主題

知識をつなげ、学びを深めることができる子どもの育成
～思いや考えを交流し、再考する活動を通して～

１．主題設定に当たって

二年前から、「交流活動」を中心とした「伝え合う力の育成」を主題として取り組んでいた。昨年度は特に本校独自に「交流ツール」を定義し、「交流ツールの効果」について実践検証を行った。交流ツールは児童の考えを整理したり、伝え合ったりする際、より交流活動が活発になるという点で効果的であることが立証された。一方で、伝え合ってはいるが、そこから学びを深めているかについて課題が残った。そこで、今年度は『深い学び』を目指して研究を進める必要があると判断した。

また、より主体的・対話的な学びを目指し、『考えたくなる課題』の設定や『振り返り』についても取り組みを行った。特に『振り返り』については教務と連携し、6 つの振り返りのポイントを明確にし、掲示物を作り、授業で取り組み始めたところである。『考えたくなる課題』については、学習過程の確認を進めつつ、研修が必要と考える。

上記のような取り組みを土台に、授業改善を行いつつ、新学習指導要領にもある、『主体的・対話的で深い学び』の実現を目指している。

本校では、『知識をつなげる』『再考』をキーワードに『深い学び』を達成するための授業づくりを目指す研修を行うこととした。なぜなら、児童の実態として、交流活動が活発に行われ、「伝え合う力」は付いてきているが、その交流活動で何に気づき、何を考え、何を学んだのかという『深い学び』に到達していない様子が見られたからである。また、本校の身に付けさせたい資質・能力の最重点目標である「考えをまとめる力」においても、『深い学び』の視点が大切になってくる。それは、伝え合うために考えをまとめるという力とともに、交流活動を行い、得た知識をつなぎ合わせるなどしつつ、教科の見方・考え方を活用しながら自分の考えを再構築（まとめ直す）していく力が『深い学び』に直結するからである。

そうしたことを踏まえ、高静小学校として、『主体的・対話的で深い学び』となるように本校では昨年度までに積み上げた「交流ツール」を活用しつつ、教科特有の見方・考え方を働かせ、『知識をつなげ』、『再考』しながら『深い学び』に到達するよう授業改善を行っていく。そうすることで、本校で身に付けさせたい「考えをまとめる力」を育てて行ければと考える。

今年度のキーワード

『知識をつなげる深い学び』『再考』

（１）児童の実態

成果

①自分の考えを整理し、まとめる力がついてきている。
②自分の考えを伝える力がついてきている。
③自分の考えを伝えようという態度が見られる。

課題

①考えを伝えるのみになっている。
②協働による考えの形成。
③主体性や意欲の低さ。

（２）昨年までの成果と課題

【成果】
・思考・表現の力を育てるための手立てとして、交流ツールの活用は効果的であった。
・交流ツールを活用することにより、より教科の目標を達成でき、学びへ向かう素地作りができてきている。
・児童間交流をする中で、交流ツールを媒体として苦手な子や自信の無い子も、自分なりの意見をもつ姿が多くみられた。
・身に付けたい力を明確にすることにより、意識して授業をすることができた。
・全員公開授業を行い、ブロックで見合うことにより、研修を深めることができた。
・問題解決的な学習の指導過程が教師も子どもも定着してきた。

【課題】
・主体的に学びに向かうための課題設定。
・思いを伝えることはできているが、共感したり自分の考えを深めたりすることが難しい。
・交流ツールの効果的な活用場面の吟味が必要。
・より一層、形態の工夫や手立てなど、発達段階をふまえた交流活動の工夫が必要。
・深い学びに向かうための教師の働きかけ方の研修。
・深い学びにおける「再考」する活動の具体化。
・交流活動や再考、振り返りなど、児童が学びを深めている場面で、どのような学びの深まりがあったのかを見取る教師の目を育てる必要性。
・学習評価の在り方に関わる研修。
・個別最適化されたUDの考えを意識した授業づくり。
・GIGAスクール構想におけるICT機器の活用の研修。

子ども達が思いや考えを深めたり共感しあったりする「交流活動」の充実。「書く活動」の継続。指導過程の充実。資質能力の向上。

２．研究主題

知識をつなげ、学びを深めることができる子どもの育成
～思いや考えを交流し、再考する活動を通して～

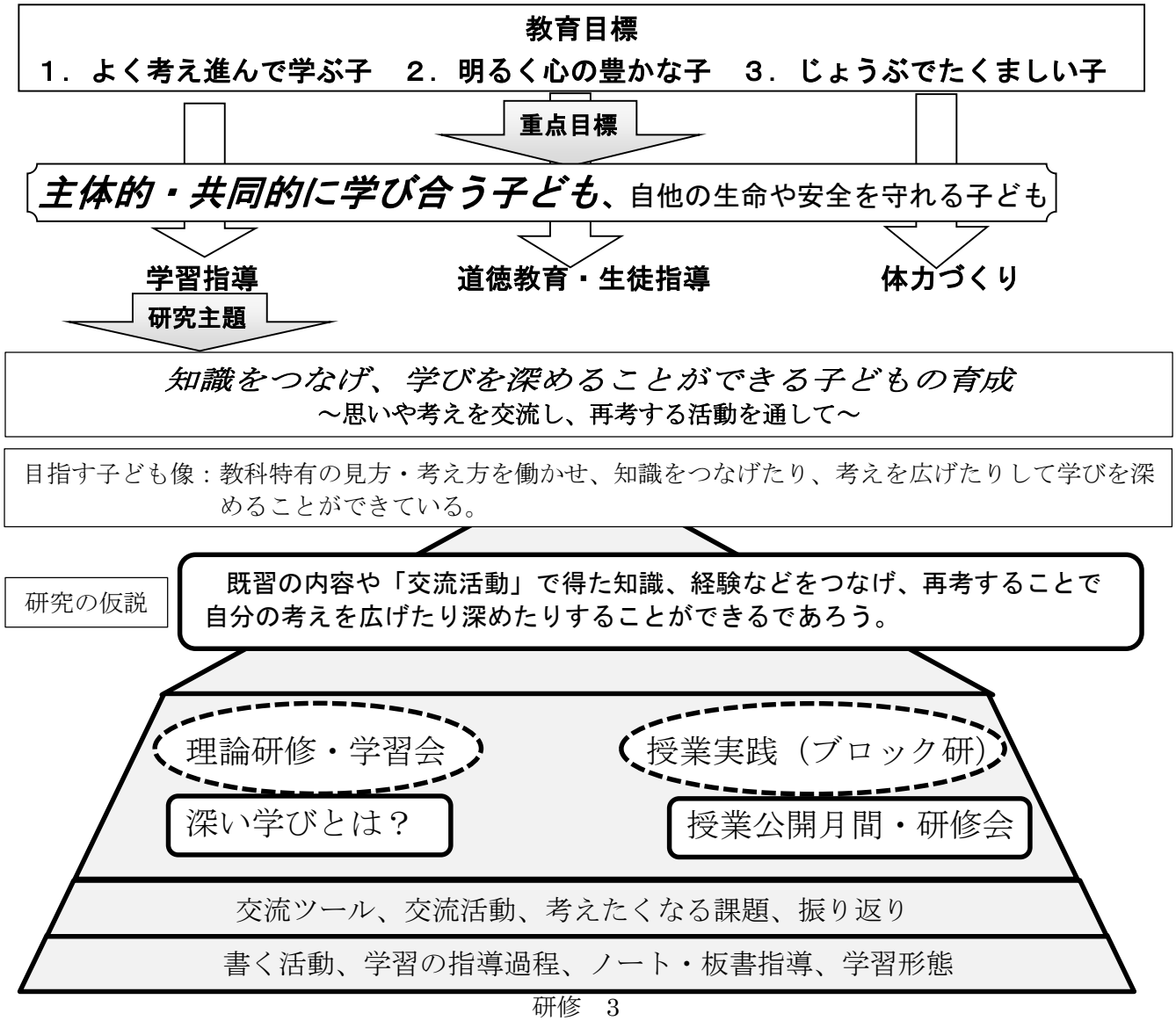
３．目指す子ども像（目指すべき資質能力）

	知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力
教科等横断的	A 言語（話聞読書）の基礎力 重点	D 自分で選び決定する力	G 自ら人とつながろうとする力
	B 情報を活用する力	E 考えをまとめる力 最重点	H 多様な考えを認め尊重する力 重点
	C 進んで体を動かし、健康を維持する力	F 考えをわかりやすく伝える力	I あきらめずに取り組み続ける力
	教科等固有の資質・能力		

４．研究の仮説

既習の内容や「交流活動」で得た知識、経験などをつなげ、再考することで自分の考えを広げたり深めたりすることができるであろう。

５．研究の構造図



６．研究の内容

日常の授業において『主体的・対話的で深い学び』の学習を進めるために次の研修内容に取り組む。

（１）中心的な内容として・・・「知識をつなげる」工夫をした授業の構築

〇交流後の再考による知識をつなげる時間の確保。

〇深い学びに向かうための教師の働きかけの具体化。（交流時の児童の様子の把握、児童の浅い知識を深める発問の吟味等）

〇深い学びを得るための教材研究。

（２）交流活動を充実し学習内容を定着していくための内容として（昨年度までの確認）

〇考えたくなる課題の設定

・児童が主体的に学ぶ意欲を高めるため、導入の工夫を行い、考えたくなる課題の設定を目指す。

〇交流ツールを活用した考えの整理をした上での交流活動をし、児童自らが考えを広げ、深める場の設定。

・交流ツールを効果的に活用するため、活用する場面の吟味を行う。

・交流ツールのおさえを全体で確認した上で進める。

・交流ツールは各教室に常設し、児童が手軽に選んで使用できるように環境の整備を行う。

〇交流は何のために行うかの明確化。

〇基本的な学習過程の定着

・基本的な学習過程の定着を図り、学習内容・方法を確実に身につけさせる。

〇振り返りの充実

・基本は以下の６つの視点で振り返りを毎時間行う。
①考えた　②なるほど　③むずかしい　④これから　⑤変わった　⑥ヘルプ

・授業の流れによっては 2 時間を一つの単位時間として振り返りを行うなどの柔軟な活用も視野に入れる。

・児童の振り返りをもとに次時の課題設定を行うなどの活用が考えられる。

〇育てたい資質・能力を意識した授業づくり

・教室に掲示し、教師のみならず児童も意識して授業に臨めるようにする。

・授業や生活の中で、「今は〇〇という力を付けるためにこの授業を行っている。」などの確認をし、意識して授業を行う。

（３）今日的な課題に向けての取り組み

〇ICT 機器を活用した授業改善

〇道徳・外国語の授業改善

〇個別最適化された授業へ

（４）

（基本的な学習過程と研修内容との関わり、授業づくり・参観の視点）

過程	学習活動　・児童の反応	交流	◎指導上の留意点 ☆評価場面●交流ツール
つかむ	問題提示 学習課題 見通し		**考えたくなる課題設定** 子どもたちが何を学習するのか、なぜ学習するのかをつかみ、主体的に学びに向かうための工夫
			書く活動の設定
深める	自力解決 集団解決		**交流活動の設定**
			再考する活動の設定 〈研究仮説〉
まとめる	まとめ 練習 振り返り		**まとめる活動の充実** **振り返り活動の設定**

主体的・対話的で深い学びの学習

（５）学習会

【研修の時間で行う主な内容】

①新学習指導要領に必要な内容
（主体的・対話的で『深い学び』・３つの資質能力の評価についてなども含む）

②「学習課題」「交流活動」「再考」「振り返り」を中心とした、研究内容の理論研修および実践編

③あゆみの評価（観点別、外国語など）

④各推進教師が割り当たっているものについて
（研修資料の配付や今後の計画など）

⑤ICT や UD を中心とした実技講習会

⑥教務以外の各分掌から必要な研修内容
（アレルギー・子ども支援情報など昨年度までも実施していた内容の他、昨年度末に各分掌から集約された体力テストの実施の仕方など）

⑦その他
＊学級経営案の交流等も研修日等の 16:15～45 の枠で検討していく。

７　推進計画

（１）基本方針

①課題を明確にして，指導方法を探る。また、研究の評価の仕方を事前に想定して運営する。

②日常的に研究内容を授業に取り入れ、その研究も進める。

③UD の視点から、個別最適化された授業づくりを行うため、本時の評価場面の学習活動や「交流活動」が難しい子どものための手だてを準備し、選択できるようにする。

④ICT 機器や交流ツールを活用し、より教科の目標を充実して達成できるよう授業づくりを行う。

⑤公開授業後に話し合われたことが次の研修につながり，学校としての指導方法を導き出せるようにする。

⑥学習会で確認されたことは，全教職員で取り組む。

（２）研究内容

研究内容
①「深い学び」の理論研修
②学習課題・交流・再考・振り返りの研究
③全員公開授業による授業づくり・授業改善の研究
④育てたい資質・能力を意識した授業改善
⑤ICT 機器を活用した授業づくり
⑥「考える道徳」「外国語及び外国語活動」の研究
⑦UD の視点を生かした個別最適化された授業づくり

（３）研究体制

①4 つのブロックを作り進める。（低学年・中学年・高学年・特別支援グループ）

②管理職や担任外の教員は研修部より 4 月当初にブロックの人数等を考え、提案して決定する。（特別支援グループを設定するため、学年団の中の人数に差が出ると考えられるため）

③各ブロックに研修部がいない場合は、研修部の中で配置を調整して、一人はいるようにして運営していく。

（４）具体的推進

①ブロック研

・低中高ブロックは、研究内容に沿ったもの、特別支援グループは児童の実態を考慮した研究内容を作成し、それに沿って進める。

②公開授業推進

・授業公開月間（8 月～10 月予定）を設けブロックごとに成果と課題を明らかにし、次の授業につなげることが出来るように研修部で推進する。

③公開授業

・公開授業の予定

1 学期　研修部提案授業・学習会
2 学期　授業公開月間（ブロック研）→授業研修会（4 学級）
　　→まとめの公開授業月間（ブロック 1 本）
＊初めに研修部で作成した授業を公開し、研究の内容等の確認を実際の授業で行う。その際指導案の形式等も確認する。
＊ブロック研は指導案を略式にするなど工夫する。

・授業研修会の公開授業は原則として、金曜日の３校時に行う。

・公開授業に向けて、指導案検討は最低限学年団で行う。（ブロックで行うなど工夫しても良い。）

・教科は研修テーマに沿った授業であれば問わない。しかし、各ブロック道徳と外国語は最低 1 本、授業公開を行う。（外国語は中・高ブロのみ）

・公開授業はどのグループを見るか割り振りし、児童の考えの変容がわかるようにメモを取る。

・公開授業は，板書を記録し、振り返りシートを記入後、授業者に渡す。その他の授業の記録の方法は各学年団で工夫する（ビデオで録画、今まで通り紙面で記録、等）。

＊初任者段階の授業公開が増えており、指導案を作成して公開する授業がある場合はそれを公開授業に代える。

④研究の評価の方法

・教師の授業を見る視点を児童主体に変えていく。（○○という手立てをしたところ、児童がどのような反応をし、△△と学びが深まっていた。など具体の姿で授業後の話し合いができるように参観する。）振り返りシートに児童の様子を記入する欄を

設け、授業前に誰がどこを参観するのか明確にしておく。

・教師のどんな働きかけが児童の深い学びにつながったのかをまとめるため、手立てと反応を記録しておく。

・授業評価と児童アンケートは継続するが、児童アンケートの一部に研究内容に関わる項目を設定し、その部分は集約して、評価に活用する。

＊2 学期のアンケート実施時期が、学校評価・家庭学習等のアンケートと時期がかさなり、事前に打ち合わせを行い、できる限り似たような質問項目が重複しないように実施する。

・冬休み中に成果課題を教職員から集め、評価する。

・その他、年度初めに必要な評価方法があれば、確認する。

２０２１年度　高静小学校　メンター研修

メンター研修担当

メンター研修とは・・・
・複数の先輩教職員が、複数の初任者や経験の浅い教職員の仕事、活動、成長を支援することで相互の人材育成を図る研修。
・従来の指導助言を行うということよりも、より初任者の自主性や意欲を大事にし、一緒に考えたり行ったりしながら共に成長していくことを目指して進めていく研修

【メンターチーム】
①学年団メンター・・・学年間での日常的な実務のサポート及び助言
②メンティグループ・・メンターのみで行う研修。内容は自分達で決定
③高静小メンター・・・各先生方の授業を参観、授業後の話し合い

※研修部が担っているのは主に③高静小メンター

１．高静小メンター研修の目的
○全職員が若手教員を育てていく意識を高め、自らも資質能力を向上させる意欲をもつ。
○若手教員がより多くの教員から学級経営や教科・生徒指導を学び、実践に役立てる。

２．内容
採用４年目までの若手教員が他の教員の授業を参観し、放課後等に授業の内容について話し合う。（15 分程度）。

３．メンター対象者
初任者段階教員（採用１年～4 年目まで）

４．具体的な取り組み
（１）メンターが今年度学びたい教科や内容の希望を把握。
○教科の決め方
・１年間で全学年１回の授業を参観。
・初任者段階（4 年間）で、全教科・全教員の授業を参観することを目標とする。
※確実にということは難しい。あくまでも目標。
・校内研、ブロック研などで参観していない教科から決める。

（２）メンター担当が、各学年に教科を割り振り、授業者の決定を依頼し、おおよその時期を決める。
・具体的な日にちについては、なるべくメンター全員が参観可能な日にちを設定する。
（全員参観が無理な場合は、担当者がメンターや授業者と要相談）
・可能な限りメンターの空き時間や学年で対応できる時間に設定。できない場合は補欠を依頼。

（３）授業参観日の設定と授業後の話し合いを行う。
・指導案や略案の作成は求めない。放課後の話し合い１０～15 分程度。
・普段の授業の様子を参観